

I'm not telling  
the truth



こどもの頃、美しい庭に迷い込んだ。  
フランス式に整えられたそこに、その  
ひとはいた。

薔薇のように美しく、しかしどこか棘  
のあるひと。

今も記憶のなかの庭では  
薔薇が咲き乱れる。  
甘ったるい香り、  
艶を含んだ声、  
白いなめらかな肌は  
上気し汗ばんで。

薔薇は散らない。

あなたはもう  
なにも言えない。



私はかつて自分が蔑んできた  
ものに変わりつつある。

どうしてあの日いっしょに  
飛び降りなかったのかな。

意味のない問い掛け、  
繰り返した後悔。

永遠に少女で  
ありたかったで  
貴女の墓前で  
自嘲した。

生き延びた私を  
きつと貴女も  
笑うだろう。





君にはじめて逢ったのは、  
秋の冷たい雨の夜。

次に再び見えた日も。  
雨の降る夜でした。



君に初めて触れたのは  
重い雲が切れた月夜。

骨ばったおとこのひとの  
あたたかいてのひらでした。

君の笑ったような目が私を鋭く見据え、  
欲のこもった色を覗かせる事にずっと  
気づかぬ振りをしました。

だって私はヒトではなくて。  
君の望む様にはできないから。

もしも願いが叶うなら  
ただ、君の幸いを。



どんなに懐かしくとも  
取り戻したいと願っていても  
振り向いてはいけない。

それはもう  
失われてしまった  
遠い遠い過去。



白鳥座を  
縫いつけて、  
一息ついた。  
夏の三角形のひとつ、  
デネブには一番上等な  
ダイヤのビーズを眺めた。

こぎつね座もかわいらしい。  
くわえたガチョウも綺麗な仕上がりがた。

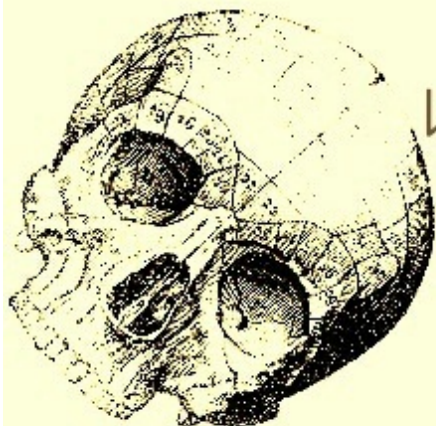
私は夜空の刺繍を生業としていた。  
だいたい半年後のものを仕上げていく。

うつくしく輝くビーズ。  
星としてきらめく。  
金糸に銀糸。  
つらなりを指し示して。

誰かを見守る光。  
闇を彩る光。

私は仕事に誇りを持っている。





醜い王様が居ました。  
けれど、とても心根の優しい、  
立派な王様でした。

ある満月の晩、王様の前に  
旅の魔女が現れ言いました。

「新月までにひとり、  
家臣をくれるなら、王様と  
その者の顔を交換して  
差し上げましょう」

王様は、悩みました。  
愛していたお后様が自分ではなく騎士の若者  
を好いていたことを知っていたからです。

あっという間に、新月の晩が訪れました。

「王様、どうされますか」  
旅の魔女は問いかけます。  
「旅の魔女よ、待たせてすまなかった。  
そなたの家臣に私かなろう」

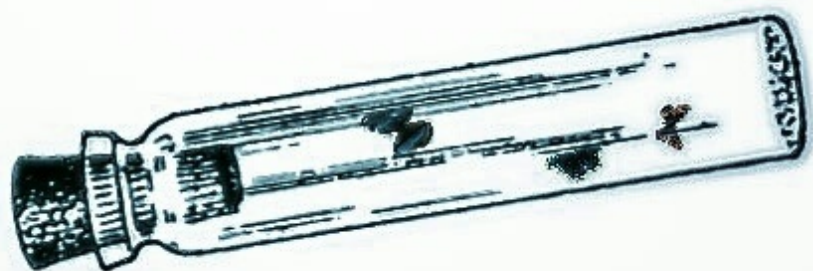
王様は、少しでも自分を  
信じてくれた者を  
差し出そうとした  
自分が許せなかった  
のです。



たももも  
しだもも  
放しだも  
手思愛友

割れて壊れて欠けて  
喪ってしまったら

そうすれば私も  
特別になれるだろうか







月からうさぎが  
飛び出して  
雪原を駆けていく。

青い影が静かにただ、  
うさぎのあとを追いかけて。



祖母の遺品を整理していた時、古い写真が一枚、何も書いていないノートに挟まれているのをみつけた。結婚式の写真だった。新郎と新婦がこちらをみている。ぼんやりとこちらの方に顔を向けている新郎は祖父だ。

だが。勝気そうな顔で笑う新婦は祖母ではなかった。

抱えていた想いも、経緯も誰も知らない。  
もう全て墓に持っていかれてしまった。

私は何故か、その写真を捨てられずに持ち歩いている。





意味などなくて  
神様も居なくて

指さされ  
罵られ

それでも



I'm not telling the truth.

私は真実を語らない。

<http://p.booklog.jp/book/93338>

著者：こいけ

<http://p.booklog.jp/users/38a1db/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/93338>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/93338>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー ( <http://p.booklog.jp/> )

運営会社：株式会社ブックログ